イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島　恒志

（第33回）
コーヒー店

4年ほど前、アイルランドを旅した時のこと。ダブリンで借りたレンタカーでそのままベルファストまで走って行き、途中、アイルランド共和国からイギリスの北アイルランドへ「国境」を超えた。国境と言ってもまだEU内でのことだったし、これと言って何も起こらなかったが、そこまでは道路標識に「○○まで～km」と出ていたのに、突然「○○まで～m」という標示に変わったので慌てた。「え、2メートル？　止まれないよ！」いやいや、イギリスではマイル標示なのだ、メートルではなく。

ベルファストまで来て車を停め、街を歩いてみると、さらにダブリンとの文化の違いが感じられた。来るまでは、どちらもアイリッシュの文化で同じような光景を想像していたのだが、はっきりとした違いがあった。と言っても、最初のうちはそれが何かは分からなかったのだが、歩いていると、慣れ親しんだロンドンの街にどこか似ているように感じられる。何だろう、何がイギリス的なのだろう、と思っているうちに気がついた。「CAFFÈ NERO」「COSTA」「PRET A MANGER」といったコーヒーショップが点在している点だ。ダブリンではあまり見かけなかった、ような気がする。後で調べたらこれらのコーヒーチェーンはアイルランド共和国でも展開しているようなので、ただの気のせいかもしれないが、ベルファストに着いた途端、あ、あるある、と目についたのだ。

これにはわけがある。29年前にロンドンに留学した際、こうしたコーヒー店は――今やアイルランドでもイギリスでも世界中どこにでもある「STARBUCKS」も含めて――皆無だった。たまにデパートのカフェなどでコーヒーを飲んでもあまりパッとしないので、やっぱりイギリスは紅茶でしょ、と紅茶ばかり飲んで過ごしたものだ。それが、13年前にロンドンに暮らした時は、これらの店が街中にひしめき合っていたのだ。しかも、おいしい。

だが、イギリスではもともと紅茶よりコーヒーの文化だった。17世紀の中ごろにロンドンやいくつかの都市にコーヒーハウスが誕生し、紅茶が広まったのもこのコーヒーハウスを通じてだった。昨今のコーヒー店の繁栄は先祖返りと言えなくもない。もっとも、コーヒーはイスラム圏諸国から、紅茶はインドから持ってきたわけだから、イギリス文化というのもどうかと思うが…。

それにしても、ベルファストで、「ああ、イギリスだ」と感じられたこれらのコーヒー店が悉くイタリア系やフランス系の店なのも何だか妙な話だ。